



コンクール入賞者と先生方

伊唐小

文部科学大臣賞受賞

特別賞に鴨川君 丸橋君

第42回南日本作文コンクールの表彰式が3月11日、鹿児島市の南日本新聞会館みなみホールで開かれ、児童15人の伊唐小学校（春木寛治校長）が3部門で最高賞を受賞しました。

このコンクールには、鹿児島、宮崎両県の171校から479作品が寄せられ、各学年の最優秀作品に贈られる特別賞を、2年の鴨川総一郎君と6年の丸橋雄吾君が受賞。学校の最高賞となる文部科学大臣賞に伊唐小学校が選ばれました。

鴨川君は昨年において2度目の快挙です。このほか、同校からは1年の堂崎慶次郎君が特選二席、3年の鴨川麗菜さんが入選に選ばれました。

全校体制で書く活動を取り入れてきた同校。文部科学大臣賞の受賞で「小さな



伊唐小2年

かも川 そう一ろう

「そう、海がにこってたら言え。」

お父さんが、うでをくみながら、海を見ている。みなとにかえるとちゅう、長くのびた赤いかたまりがながれてきます。赤しおです。

「しまったね、赤しおが出た。」

お父さんは、ふねを赤しおの中にとめます。赤くにこった海の水を小さなカッブにとります。みなとにかえってからは、けんぴきょうでしらべてもらうためです。

「九百九十ぴきいますよ。」

百ぴきをこえると、さかながびょうきになつてしまいます。

「ねん土をまかんば、いけんか。」

お父さんは、すぐに立ち上がりました。

お父さんが、みんなにでんわをかけます。

ねん土まきは、力をあわせないとできません。しんせきのおじさんたちが、それぞれのふねでそうこにあつまつてきます。ほくぐらいのおもさのねん土をはこ

お父さんと赤しお

と、うでに元気がもどります。ほ

びます。五十ふくろのねん土をみんなのでふねにつみこみます。みんなのかおは、あせてぬれています。そうこからふねまで、かたにかついでなんかいもはこびます。おもくてはこべないほくは、じやま

しないように見ているだけです。

あかしおの海につきました。ほくは、ふなぞこに入つて、デッキブラシで、ねん土のこなと海の水をまぜます。ふねの

そこには、こなをまぜるための水が、ほくのひざの上まで入っています。

「いれるぞ、じゅんぴはいいか。」

おじさんの声といっしょに、ねん土のこながふつてきます。上から入れられるこなが、おうど色のけむりになってはな

入ります。ほくは、口をかたくとして、

こなと海の水をまぜます。しばらくすると、お父さんの大きな声がふなぞこにも聞こえてきます。

「もつと、ねん土をこゆくせんか。」

すると、ねん土が二ふくるぶん、一どにふつてきます。パンツまで水がしみこみます。それでもデッキブラシをうごかして、ねん土をこねつづけます。

お父さんは、小さなふねにのつて、いけすのまわりを見はります。ほかのふねにさしずをしています。

「おきにもいるから、いけよ。」

「いちおつ、そこにもまいとけよ。」

海いっぱいひびく声がふなぞこに、こだまのように聞こえます。いつもとちがう、こわい声です。お父さんの声を聞く

と、うでに元気がもどります。ほ

くは、今までよりも力を入れて、ねん土をいきおいよくかきまぜました。

ねん土まきがおわり、みなとにもどります。みんなは、ふねの上しやがみこ

んでいます。お父さんがのっているふねが、ほくのとなりにならびます。お父

さんは、まつすぐまえを見て、かじをりょう手でしつかりにぎっています。

ほくは、お父さんがきのう言ったことを思い出していました。

「ぎよねんは、二百ぴきしんだが、赤しおにはまけんぞ。」

気がつくつと、ほくはワイヤーをぎゅつとにぎりしめていました。ほくは、明日も、ねん土をまきに、お父さんといっしょに海に出ます。